

2016年度教師海外研修(パラグアイ) 研修報告書

| | | | |
|-----|------------|----|-------|
| 学校名 | 蟹江町立新蟹江小学校 | 氏名 | 村田 義剛 |
|-----|------------|----|-------|

<印象に残る写真2点>

●写真1 [0754]

んっ!?! TOKYO!?!

パラグアイでやたらと見ることが多かったこの看板。実は家電製品を取り扱っている中国の会社。日本製品への信頼をこんなところで感じるとは思ってもいなかった。すごいぞニッポン!!



●写真2 [2528]

よーし、小学校でサッカー交流だ!!

休み時間は元気のいい子どもたちとサッカー!さすがパラグアイ!子どもたちのレベルが高い!そしてこの写真の直後、私は足を捻挫しました。痛かった。(笑)



1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私は、子どもたちに「世界の国々と自分との“心の距離”を縮めてほしい」という思いをもって研修に参加した。私は6年生の子どもたちに「知ることから始める国際理解教育」をテーマに、開発教育を行っている。その中で海外研修経験をおもちの先生方を学校にお招きし、本やインターネットではわからない生の教材を用いて授業をしていただいた。私自身も、子どもに生の声を届けたい・子どもが自ら世界のために一歩踏み出すきっかけを作りたいという思いが強まり、研修に参加させて頂いた。研修に参加し、パラグアイという国の文化・風土・人柄等を肌で感じる事ができた。しかし、それと同時に、自分の「世界」への捉え方の狭さ、また、心の中で価値観・先入観を無意識にもっていたことに気付かされた。「幸せの尺度」「時間の感覚」など、日本とは異なる点が多くあることに気付くことができた経験であった。この自分自身の気付きも踏まえ、パラグアイという国について肯定的に出会ってもらえるような授業を行い、そこからパラグアイの課題や自分たちにできることなどを、子どもたちと考えていきたい。

2. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

（1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

滞在初日、JICA 職員の竹村さんから「パラグアイに来た人はパラグアイを好きになって帰るが、その理由を上手く説明できない。」という説明を受けた。そのお話を聞いたときは「??」。しかし、10日間の滞在中を通して、まさしく自分がその気持ちに当てはまる。パラグアイの「〇〇が好き！」という具体的な事例がでてこないが、いつも訪問先を後にする際、名残惜しい気分になる。訪問先の学校・施設の方々が丁寧に、かつジョークを交えて説明してくださったこと、ホームステイ先でテレレを回し飲みしながらのんびり過ごしたこと、スーパーでお土産を探しているときに日系の方がおすすめ商品を教えてくれたこと、それらの人と人との繋がりが、パラグアイを好きになった理由であり、パラグアイの良さであるのかなど今になって感じる。途上国からのテイクオフ期に入っているパラグアイ。発展して経済的に豊かになったとしても、いつまでもこの温かい国民性は残っていてほしい。

（2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

パラグアイの首都アスンシオンには、日本の自動車会社の看板が多く見られた。中にはTOKYOという名前の中国企業のメーカーもあり、日本の製品への信頼が高いことがわかった。その中でパラグアイと日本とのつながりを強く感じたのは、日本からの移住された方々との交流である。イグアス居住地では、日本から遠いパラグアイという土地に、もうひとつの日本があったのかと思わせるくらい、日本の文化が守られ、伝えられ続け、大切にされていた。しかし、私も含め、日本で生活している多くの人がこの事実を知らない。日本が震災の被害にあって大変だった時期に、百万丁の豆腐を届けてくれた団体がパラグアイにあったことも、日系移民がパラグアイの小農家を救うためゴマ栽培に着手し、現地の人々と協力して産業を支えたことも、その多くの事実が日本に届いていない。私たち教師にはこれらの学びを伝える対象があるので、その情報を子どもたちにしっかりと伝え、違う角度から日本を見つめ直してもらいたい。

（3）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

様々な国から支援を受け、今、経済発展を遂げようとしているパラグアイ。その支援を、パラグアイが自分たちで維持、発展を続けなければならない。研修では職業訓練校で、日本の企業から援助された施設・備品を用いて技術を学んでいる学生と出会った。きっと、これからのパラグアイを支えてくれる若者達になるに違いない。日本も戦後、多くの国からの支援を受け、発展を遂げて今がある。その恩返しとしてJICAは世界の国々への支援を行っている。パラグアイと日本は地理的にも、文化的にも異なる点が多くあると思うが、日本のこれまでの歩みはパラグアイのこれからの成長にとって参考となると考える。また、ニャンドゥティ工房では、パラグアイの伝統工芸品の繊細さだけでなく、完成までの労力も知り、商品として売られている値段の安さに驚いた。伝統工芸品を数多く生産している日本のビジネスモデルも、きっとパラグアイの経済を支えるものとなるであろう。そのモデルとして、日本は今後10年、20年後はどのように発展していく必要があるのかを考えるきっかけとなった。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

「良い!と思ったところ」は、青年海外協力隊の活動が、途切れることなく引き継がれているところであると感じる。私は、10年前に青年海外協力隊としてパラグアイに派遣されていた教員の方と同じ職場で働かせて頂いた経験があるが、その方は「自分たちが伝えてきたものが、その場限りのものになってないか心配」というお話をされていた。しかし、小学校訪問の際、青年海外協力隊の都倉さんは、教具や指導法等を、これまで協力隊として派遣されていた方の流れを引き継ぎ、かつ発展させていた。その永続的な繋がりがパラグアイの地に新たな教育を根付かせるものになると感じた。

「今後あるといいなと思う視点」は、行政面でのシニア海外ボランティア派遣の充実を挙げる。研修をさせて頂き、パラグアイ各地で、世界からの援助によって発展をし始めている様子を見ることができた。しかし、国内の産業格差や、ニヤンドゥティ工場のビジネスモデルなど、経済が上手く回っていないように感じた。素人考えではあるが、そのようなことを解消するノウハウを経験豊富な方に行政からの視点で指導して頂けるとパラグアイ全体の生活が潤うのではないかと考える。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

④ 地域と歩む学校づくり支援プロジェクト／コロネル・オビエド市教員養成校 [村田／笹ヶ瀬]

コロネル・オビエド市にある教員養成校へ。パラグアイで教師になるまでの過程として、教員養成校で3年間学ぶことが義務化されている。参観させて頂いた教室では、教師を目指している学生がエクセルの使い方を学んでいた。プロジェクトはスペインからの援助であり、それを見ながら学生達は意欲的に表計算に取り組んでいた。パソコンも1人1台、DELLの比較的新しいものを使っており、「開発途上国？」という自分の先入観とのズレに気付いた場面であった。教師の方々との意見交換会では、教師として大切にしていることとして「計画をもつこと」をあげられていた。文化は違えど、どこの国でも変わらない、教育をする上で大切なことであるなと認識することができた。また、弁護士や医者など、専門職に就きながらも教職の資格を取ろうとする若者とも出会い、彼女達から「自分の技術を役に立てたい」という言葉を聞いたときは、素直に「カッコいい！応援したい！」と感ずることができた交流であった。(村田義剛)

⑦ イグアス日本語学校 [市江／村田]

宿泊していた福岡旅館から歩いてイグアス日本語学校へ。まずは朝の朝礼。パラグアイの国旗と日本の国旗をどちらも同じ高さに掲げて朝礼を始めていた。「気をつけ、礼。」という号令やラジオ体操など、そこはもう日本であった。授業はラパーチョコース、日本語コースに分かれており、日本語の教材を用いて授業が進められていた。小学校高学年から中学生の授業ではハイレベルな漢字の学習や尊敬語と謙譲語の違いなど、日本の子どもたちでも苦戦するような問題を取り扱っていることに驚いた。授業交流では中学1年生の教室で川柳を取り扱った。パラグアイのよいところを川柳で表現し、オリジナルはんこを押すまでの作業を楽しく進めることができた。この訪問が終わった後、バスに戻る先生方はみなさん生き生きとしており、「やっぱり子どもとの交流は楽しいよね！」と話していた。子どもたちからたくさんのお元気をもらえた時間となった。(村田義剛)

⑨ パラグアイ人宅でのホームステイ [全員]

ホームステイ先はイグアス居住地から車で10分程の場所にある農家のご家庭であった。ご家族に温かく迎え入れてもらえ、ホームステイへの緊張が少し和らいだ。お家はとにかくきれいで広く、ゲストルームやお風呂場などの設備も高級ホテルのよう。パラグアイの富裕層家庭であることがすぐにわかった。お父さんが広大な農地を管理するお仕事をされており、奥様、息子さん、娘さんの4人で温かく暮らしていた。お子さん2人はイグアス日本語学校に通っていたこともあり、日本語で会話をすることができ、多くのコミュニケーションをとらせてもらうことができた。2日目の朝、天気が良かったので、外でご夫婦とテレレを回しのみしながらのんびりと時間を過ごした。特に、多く会話をし、笑い合った時間でもないあの時間が、パラグアイ研修の中で一番幸せを感じた時間であった。日本にもこんな時間があれば・・・と思いながらも、これはパラグアイでしか感じるできない時間であったのかもしれないなども感じた。(村田義剛)

⑬ ニヤンドゥティ工房 [村田／児玉]

イタウグア市内にある宿泊先から歩いてニヤンドゥティ工房へ。その道中、ニヤンドゥティを多く取りそ

えているお店に立ち寄り、私たちは大興奮しながら、繊細で、かわいらしいパラグアイの伝統工芸品「ニャンドゥティ」を購入した。小さいものだと100円弱で買うことができ、その安さに驚いた。ニャンドゥティ工房はビルのような建物の中にあり、そこでは工房だけでなく、商品の販売、ニャンドゥティ作りの講座なども開かれているようだった。作り方のDVDを見させてもらったが、その一つ一つが繊細で、小さなものでも労力と時間を使うものであることがわかった。「こんな大変な作業に100円でいいの？」という購入者としての自分の思いは複雑であった。日本は伝統工芸品がブランド化され、比較的高価に取引されているものもある。このニャンドゥティもそのようなビジネスモデルを参考にして、生産者までお金が届くシステムが根付いてほしいと思う。(村田義剛)

⑩-1 アスンシオン市内見学・教材収集 [児玉／村田]

アスンシオン内の露店を巡った。公園の中いくつか店舗があり、安い値段で数多くの品物が売られており、日本の京都の観光地付近にあるお土産屋さんのようなイメージであった。パラグアイの国旗やニャンドゥティなど、日本に持ち帰りたいと思わせるような教材を多く収集することができた。スーパーでは、食料品を中心に品物を購入した。マテ茶のコーナーは品ぞろえが豊富で、さまざまなパッケージの商品が棚いっぱい陳列されていた。日本へのお土産にお菓子でも・・・と考えたが、パラグアイ産というものが少なく、ほとんどがブラジルやアルゼンチンから輸入しているものばかりであった。今後、発展を遂げる中で、国内ブランド等も増えてくることを期待したい。(村田義剛)

⑩-2 ランパレの丘など [村田／市江]

パラグアイ滞在最終日。アスンシオンの外れにあるランパレの丘へ行った。そこからはアスンシオン市内が一望でき、住宅街や高層ビル、至る所にピンク色に染まったラパーチョが咲き誇っている絶景スポットであった。しかし、川沿いにバラックのような集落群が。そこはパラグアイで最貧困地区といわれているカテウラ地区。その周辺までバスで見学することができたが、降りるのは危険なので禁止。車内からの見学をさせてもらった。ここまでパラグアイに来て、「貧困」というものを感じたことがない。そのくらいパラグアイは発展を続けている。しかし、私たちが見たものは、舗装されていない道。下水処理がままならず、緑色になった排水。ゴミだらけの道ばた。この光景を見ずにパラグアイを語ることはできなかったと思う。世の中にはいろいろな違いがあり、それを多様性というが、私たちが見てきたパラグアイと今見ているパラグアイの違いは無くさなければならぬものであると思った。(村田義剛)

5. 来年度参加する先生へのアドバイス (持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など)

- ・質問を誰がするか、どこでするかなど、事前研修で時間がかかることがあった。基本「この質問は〇〇ね！」と決めておいて、グループが分かれるようなら「マスト質問」は分担できるようにしておくこと。今回は当日それがスムーズに行けた。
- ・お土産係さんが大変そうだったが、渡された方にはとても喜んでもらった。青年海外協力隊の方々には日本の駄菓子がうれしいらしいので、みんなで色々な種類をもっていくのもよいと思う。
- ・本当にフラットな状態で世界と触れ合ったほうがよい。大体の授業案をもってパラグアイ研修に臨んだが、その授業の形に合わせようとしながらパラグアイを見てしまった。(パラグアイは発展途上国という強いイメージを自分の中でもってしまっていた。) イメージをもって研修に望むことが価値観、先入観につながってしまったのが自分の反省点。
- ・NO、無理・・・を言える環境は大事。体を壊したら元も子もない！今回は仲間に本当に助けてもらった。
- ・「使わないかもしれないけど小道具」は常にリュックに入れておくこと。交流で時間が余った際にフル活用できる。今回は日本の学校の写真をファイリングしたもの、ストロー吹き矢、折り紙などで子どもと交流でき

た。

- ・あちらの学校での交流の際、日本の子どもと繋がるものを用意しておく、帰国後子供たちが「世界とつながった」と思えると思う。私は和紙や日本の広告、新聞をラミネートしてしおりを作り、100個ほど持っていった。それをもらって喜んでいる子の写真を見せたら、派手に喜んでいました。
- ・顔写真とメールアドレスが入った名刺を出会った人に配った。日本に戻っても繋がる。

6. その他全般を通じての感想・意見など

JICA 中部、NIED・国際理解教育センターの皆さんのご支援のもと、素敵な研修の機会を与えて頂き、ありがとうございました。必ず今回の学びを子どもに還元させます。また、このような研修・活動があることを多くの先生方に知ってもらい、認めてもらえるようにこれからの教育活動に尽力していけたらと思います。お姉さん方も本当にありがとうございました。

出会いに感謝！！

以上

